



城南坂

校長だより No.7
R8. 5. 13(水)
校長：佐々木雄治

学校教育目標 「志と誇りをもち 主体的に行動する生徒の育成」

お辞儀のもつ力

5月も中旬にさしかかりました。今週は天候がよく、日中の気温も20℃を超えるなど夏がもうそこまでやってきている気配をひしひしと感じます。この時期は体がまだ暑さに慣れていないため、それほど気温が高い状況ではなくても熱中症のリスクが高まります。プレザーの着用について判断したりインナーでの調整を行ったりするなど、気温や自らの体調に応じた服装選びに努めるとともに、先週の保健だよりにもあった「暑熱順化」が進むよう、運動や入浴などで汗を流すことを心掛け、自らの健康をしっかりと管理してほしいと思います。

先週末の5月9日(土)～10日(日)には、あきた芸術劇場ミルハス大ホールで秋田県中央地区吹奏楽祭が開催され、本校吹奏楽部も土曜日に演奏を披露してきました。演目は前日の金曜ロードショーで放送されたジブリ映画「魔女の宅急便」のメドレーで、部員全員がステージ演奏を楽しんでいる様子が伝わってきました。約2か月後の吹奏楽コンクール中央地区大会でも、緊張感の中にも楽しみながら演奏できている姿が見られることを期待しています。 <『illust image』より>



さて今日は、今シーズンからメジャーリーグ、トロント・ブルージェイズに移籍し大活躍している野球の岡本和真選手の話です。5月1日に行われたミネソタ・ツインズとの試合で、岡本選手は2打席連続でホームランを放ちました。その際、岡本選手は喜びと感謝を表すために、ベンチに戻ってヘルメットを脱ぎチームメイトにお辞儀をしたところ、チームメイト全員もそれにお辞儀で応えるというシーンが各メディアの報道で話題となりました。まだ入団してから日の浅い岡本選手が、慣れない異国の地で言葉や文化の壁を乗り越えて活躍を見せている要因のひとつが表現されていたなと感じる名場面でした。このおじぎパフォーマンスが誕生する背景となったのは、岡本選手がブルージェイズで始めた「感謝の円陣」というルーティーンです。試合前にチームメイトが輪になり、それぞれの選手がそのときに感謝していることを、口に

出してお辞儀をすることにより、互いに感謝の気持ちを共有し結束力を高めるねらいがあり、この儀式が実際にチームにポジティブな雰囲気を生み出していることが伺えます。城南中学校でも「輝きプロジェクト」でクラスメイトのよいところを伝え合う活動を行っていますが、選手間でそれがルーティーンとなり、主体的に行われているところに素晴らしさを感じました。自分たちのクラスや部活動等のチームにも取り入れることで、団結力を高められそうですね。

お辞儀パフォーマンスといえば、サッカー日本代表のサイドバックでイタリアセリエAのインテルで活躍した長友佑都選手も、移籍後に初ゴールを決めた際、祝福に駆け寄るチームメイトに対し感謝の気持ちを込めて深々とおじぎをしたことがチーム内で流行となり広まったことがありました。また2019年に日本で行われたラグビーワールドカップでは、オールブラックスの愛称で知られるニュージーランド代表が、試合後に対戦相手はもちろん、悪天候の中でも一生懸命応援してくれた日本のラグビーファン、そして運営スタッフの方々への感謝の気持ちを表すために、腰を90度に折り、深々と頭を下げる「日本式のお辞儀」を披露しました。それが他国の代表チームにも広まっていったことなどが思い出されます。

日本のお辞儀文化は単なる挨拶の動作ではなく、**相手への敬意、感謝、配慮を表す「礼を尽くす」ための所作**です。言葉がなくても相手への思いやりを伝えることができる、日本独自のコミュニケーションの手段であり、互いにお辞儀で礼を尽くすことで集団の和を深めると同時に、自分の味方になってくれる人を増やしていく結果にもつながります。つまり丁寧なお辞儀で相手に礼を尽くすことは、自分自身のためにもなるのです。



<『ピクチャー』より>

毎朝、玄関であいさつをしていると、元気な声であいさつを返し、丁寧にお辞儀をしている城南中生がたくさん見られます。こうしたあいさつから始まるコミュニケーションを大切にしていける姿がさらに広がり、愛される城南中学校の創造につながっていけばうれしいなと思います。